様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７３００２３１
研究課題名（和文）　「育児不安」に関する国際比較研究

研究課題名（英文）　Cross-cultural study of child care

研究代表者
深谷　昌志（FUKAYA MASASHI）
東京成徳大学・子ども学部・教授
研究者番号：00031542

研究成果の概要：本研究は日本で見られる「育児不安」が、他の社会でも存在するのかを国際比較調査を通して明らかにするのを目的とする。調査結果によると、比較した 5 地域の中で、それぞれの都市に固有の育児の問題が見られるが、日本的な意味での不安は見られなかった。そうした中で、東京の母親は親になるのをもっとも楽しみにし、献身的に子育てにあたっていた。母親として、熱心に子育てをする反動として、育児不安に陥る事例が生じる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	4,200,000	0	4,200,000
２００６年度	4,900,000	0	4,900,000
２００７年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
２００８年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
総　計	15,000,000	1,770,000	16,770,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般
キーワード：育児不安、親性、子育て支援、母乳、父親の育児関与、虐待

１．研究開始当初の背景

(1) 研究開始前の研究

本研究開始に先立って、2001 年から東京成徳短期大学内に研究ティームを立ち上げ、学内外の専門家と、育児不安の調査を開始した。幼児の虐待などの背景に母親の精神的な不安定さが存在するという仮説から、育児不安の構造を明らかにしたいと考えた。

そして、東京の母親に見られる育児不安は①核家族の状況のもとで、②主として高学歴で、③退職した、④専業主婦が、⑤子どもが病弱で、⑥夫が育児に無関心などの条件の組み合わせから生じやすいことを明らかにした。

(2) 国際比較研究の取り組み

本研究は育児不安の国際比較を試みたものだが、国際比較調査については、1970 年代から、子どもの未来像、学業成績観、教師への期待などをテーマとして、数多く重ねてきた。また、アジアでは、保護者の意識調査を行った経験がある。

そうした背景があるので、育児不安についても国際比較調査が充分に可能だと考え、本

研究を始めることにした。

２．研究の目的

(1) 子育てをめぐる社会的な背景の分析

本研究で取り組みたいのは育児不安の国際比較だが、それと同時に、それぞれの社会の子育て事情の聞き取りが重要になる。特に一人っ子政策を実施している北京、家族の変容が進んでいるマルモ（スウェーデン）、儒教の名残りを感じるソウルなど、研究対象地域はそれぞれの社会的な背景を異にしている。それだけに、子育てに関連して、地域性を慎重に分析することが肝要になる。

(2) 育児不安の構造の比較研究

東京など日本での研究で、育児不安をとらえるための尺度の作成を行った。

「子どもが 3 歳位になった時」

①「毎日育児の連続でくたくたに疲れる」
②「子どものことを考えると面倒になる」
③「子どもがうまく育たないのではないか心配になる」
④「自分の子どもでも可愛くないと思う」
⑤「社会的に孤立しているのを感じる」
⑥「子どもが散らかすので嫌いになる」
⑦「子どもが煩わしく、イライラする」
⑧「自分は母親に向いていない」
⑨「他の子どもと比べ、発達の遅れが気になる」
⑩「外で働いている夫がうらやましい」

の 10 項目を 4 段階尺度で質問し、それを加算する。

そして、サンプルを育児不安の「強い群」「中間群」「弱い群」に 3 分する。東京ではこの尺度を活用して、育児不安の構造を分析することができた。そこで、他の社会での分析を通して、日本的な育児不安が認められるかどうかを明らかにしたいと考えた。

３．研究の方法

(1) 調査票の枠組み

東京の調査では、小学低学年の子どもを持つ親をサンプルに定めた。幼稚園の親を対象とすると、専業主婦の育児事情を聞くことになるし、保育園対象では働く親対象の調査となる。そこで、親全体をカバーしつつ、子育ての感覚を持っている世代という意味で、小学低学年を研究の対象とした。

また、母親の育児意識と同時に、父親の育児関与を調べたかったので、調査票の前半を母親用、後半を父親用として、両親の育児事情を尋ねる方法を考えた。

(2) 国際比較研究のスケジュール

育児の問題は都市と農村では状況が異なるが、多くの社会では、都市の方が育児の問題は深刻であろう。そこで、本研究では、各国の大都市で調査を実施することにした。

なお、都市の選択にあたり、これまで研究代表者の深谷昌志が国際比較調査を実施した都市での調査の実施を考えた。

具体的な都市名とそれぞれの地域の拠点となった研究機関名、調査実施年度は以下の通りである。

① ソウル―白石大学　2005 年、2006 年
② 天津―天津大学　2006 年、2007 年
③ 台北―空中大学　2005 年
④ サンフランシスコ―カリフォルニア州立大学　2007 年、2008 年
⑤ マルモ（スウェーデン）―ヘルス・ケアセンター　2007 年、2008 年

ソウルと天津、台北では、都市での調査とは別に農村部の調査を実施した。また、中国では、天津の他に、北京、青島、フフホト(内モンゴル)での調査を実施した。

なお、ソウルの白石大学、中国の天津大学、サンフランシスコのカリフォルニア州立大学は、東京成徳大学子ども学部と姉妹校の関係があり、毎年、定期的に学生や教員の交流があるため、比較調査の委託が容易だった。

(3) 国際比較のための調査票の作成

国際比較調査の実施にあたり、東京や横浜などの国内都市で、5 回の調査を実施し、調査票の精度を高めてきた。確定した東京版の調査票をベースに国際比較調査を行うために各国版の調査票を作成した。

① ソウル＝ハングル版
② 北京＝中国語版
③ 台北＝台湾語版（中国語だが、大陸と異なるため）
④ サンフランシスコ＝英語版
⑤ マルモ＝スウエーデン語版

調査票作成後、各都市を訪ね、育児環境についての聞き取りを行うと同時に、調査が可能かどうかの検討を行った。

ソウルや台北は打ち合わせが順当に進んだ。しかし、天津では、一人っ子政策がとられ、保育事情が異なるので、調査票に一部手直しを行った。特にほぼ全員の母親が就労しており、保育施設が充実しているので、そうした関係からの項目追加の要請があった。

サンフランシスコとマルモでは打ち合わせが難航した。家族が変容しているのに加え、多民族化している。

アジアの都市では、前半を「母親用」、後半を「父親用」としてあるが、サンフランシスコとマルモでは、離婚や再婚が一般的なのに加え、事実婚も多い。さらに、同性のカップルが増加している。したがって、調査票から父親と母親に関連する項目を削除することにした。

また、プライバシー感覚が徹底しており、子育てについての事情を聞くことはできる

が、調査の実施は難航した。特に学校を経由して調査票の配布を考えたが、保護者から拒否される事例が続いた。

そこで、アジア版の内容を圧縮し、父や母という名詞を削除するなど、簡略化した調査票を作成した。

４．研究成果

(1) 調査の実施状況

①ソウルと②天津、③台北では順調に調査を実施でき、その後の補充調査として、農村部での調査を行うことができた。

④サンフランシスコは 2007 年に現地を訪ね、調査票の改定を行いながら、調査予定校で打ち合わせを行った。しかし、数校で調査を拒否されたので、2008 年に再度、調査の依頼を行った。2008 年度末、回収できたのは 21 通だった。参考のデータにはなっても、量的に不足しているので、現在、70 サンプル程度を確保してくれるように依頼を続けている。

⑤マルモでは、2007 年度に打ち合わせを行った後、2008 年に現地を訪問し、調査の折衝を行った。2008 年度末に 78 サンプルを回収でき、仮の集計を行った。しかし、量的にやや不足ぎみなので、現在、30 サンプル程度の追加を求めている。

④のサンフランシスコと⑤のマルモについては、2009 年 10 月まで調査実施を延長し、可能なら、両都市のデータを加えて、結果を公表したいと考えている。

(2) 調査結果から

上記の理由から、現在までに資料の分析を完了している東京、ソウル、天津、台北の 4 都市のデータを中心に結果の概要を紹介したい。

①　サンプルの属性

表１　子どもの数　(%)

	東京	ソウル	天津	台北
1 人	19.7	6.5	93.8	14.0
2 人	55.5	82.1	5.1	56.3
3 人以上	24.8	11.4	0.2	29.7

表１から明らかなように、一人っ子政策が採られている天津では一人っ子が 93.8%を占める。なお、少数民族や農村部、両親とも一人っ子などの場合、2 人目を産むことができる。それが、天津の 5.3%の意味である。

表 2 は、母親の就労形態を示している。表から明らかなように、東京とソウルは専業主婦が子育てをする都市だが、天津はほぼ全員がフルタイムで働いている状況下にある。

さらに、表 3 に祖父母との同居の有無を示した。東京のデータでは、核家族の場合、育児不安に陥る割合が高かった。天津の場合、祖父母との同居率が高い。中国は社会主義化された社会と思われるが、庶民レベルでは伝統的な家意識が残っているのであろう。台北も同居率が高いことを視野に置くと、中国では家意識が定着しているのを感じる。

表 2　母親の就労形態　(%)

	東京	ソウル	天津	台北
専業主婦	49.9	54.8	8.9	36.6
パート	24.4	14.3	0.7	5.7
フルタイム	17.0	13.7	72.2	43.1
その他	22.0	17.2	18.2	14.6

表 3　祖父母との同居　(%)

	東京	ソウル	天津	台北
夫の両親	5.6	3.3	19.8	19.2
妻の両親	11.9	11.6	28.3	44.2
夫婦のみ	82.5	83.1	51.9	36.6

このように見てくると、子どもが 1 人で母親がフルタイムで働いているのが天津。それに対し、2 人の子どもを専業主婦で育てているのが東京とソウルになる。

なお、「出産で退職した時、辞めるのが残念だったか」の問いに、東京の残念率は 16.8%なのに、ソウルは 36.6%に達する。ソウルの母親は、残念な思いをして、子育てをしているのであろう。

②　親性の形成

母親になると、自分の時間を持てなくなる。そして、一段落するまで、育児が連続している。それだけに、親になることをどう感じたのかが重要になる。

表 4　妊娠を聞いて　(%)

	東京	ソウル	天津	台北
嬉しい	64.3	53.8	47.5	47.8
やや嬉しい	14.6	18.6	27.6	36.1
やや当惑	9.1	8.8	12.3	14.0
当惑	12.0	18.8	12.6	2.3

「妊娠を聞いて」の問いに、東京の母親の 64.3%は「嬉しかった」と答えている。これは、他の 3 都市と比べ、10%以上、数値が高い。

表 5　親性の形成　(%)

	東京	ソウル	天津	台北
妊娠	20.5	18.1	17.6	16.7
胎動	37.6	31.0	31.2	28.8
産声	58.6	48.4	50.3	42.4
授乳	71.1	67.1	60.7	52.6

「母親になると、とても感じた」割合

女性は生来母性を持っていたというのは錯覚であろう。妊娠し、胎動を聞き、出産、そして、授乳をする。そうした過程を通って、母性が形成されるといわれる。

表5の結果は、地域差を超えて、「妊娠―胎動―産声―授乳」と、出産が近づくにつれて、母親意識の形成が進んでいる。そうした中で、東京の母親の親性の形成がもっとも高く認められる。

なお、「1歳の頃の主たる育児担当」は、表6の通りで、東京とソウルは母親が育児担当者の割合が高い。

表6　1歳の頃の主たる育児担当者　（%）

	東京	ソウル	天津	台北
母親	61.3	60.5	46.9	36.1
夫婦	27.6	22.9	28.3	30.5
祖父母	8.1	9.4	23.3	27.5
保育所	3.0	7.2	1.5	5.9

また、「生まれる前に予想していたより、赤ちゃんは可愛かったか」の問いに、「とても可愛かった」と答えた割合は、東京61.5%、ソウル47.4%、天津57.5%、台北58.6%の通りである。東京の母親が「子どもを可愛い」と思っている割合は、他の都市よりも高い。

③　子育てへの評価

子どもが生まれた時、どの社会の母親も育児に苦労している。しかし、1年、2年と、子どもが成長するにつれて、育児の負担は軽減される。

それでは、上の子が3歳になった時、母親が疲れているかの反応は表7の通りである。この項目は先に紹介した通り、東京では育児不安をとらえる尺度として利用している。

表7　子育ての大変さ　（%）

	東京	ソウル	天津	台北
A	14.9	5.1	3.2	2.8
B	30.6	20.6	23.5	17.3
C	32.1	34.3	11.4	20.9

A＝「子どもが可愛くない」
B＝「母親に向いていない」
C＝「子どもが煩わしくイライラ」
数値は「とても」＋「わりと」感じる割合

このように他の都市と比べ、東京の母親は、自分の親性に疑問を抱き、精神的に不安定の割合が高い。

したがって、それぞれの都市に固有の問題として、その社会なりの育児の問題があることは確かだが、東京的な意味での「育児不安」は他の都市では少ないように思われる。

それでは、母親たちは「自分が母親になったことをプラスに思っている」のであろうか。表8に調査結果を示した。どの社会の母親も母親になってよかったと答えている。母になる体験は貴重なものなのであろう。そして、4都市の中で、母親になってプラスという感じは、東京の母親がもっとも数値が高い。

表8　母親になったのはプラスか　（%）

	東京	ソウル	天津	台北
とてもプラス	59.4	30.9	53.3	43.1
プラス	31.3	46.2	31.2	34.1
マイナス	8.4	21.5	14.2	13.7
とてもマイナス	0.9	1.4	1.3	9.1

④　父親の育児関与

この研究では、これまでふれてきた母親調査に加え、父親対象の調査を実施した。

「出産の時に立ち会ったか」の問いに対する回答は表9の通りである。東京とソウルの父親のほぼ半数は妻の出産に立ち会っていない。

表9　出産に立ち会ったか　（%）

	東京	ソウル	天津	台北
同室	16.3	17.6	18.0	46.1
廊下	26.5	30.3	47.0	40.2
立ち会わない	57.2	52.1	35.0	13.7

出産の時に立ち会ったかは、父親の育児に関する関心度を象徴している。東京とソウルの父親は中国系の父より、出産に立ち会う割合が低い。

表10は母親を対象に親性の形成を尋ねたのと同じ項目で父親の親性形成の度合いを確かめてみた。

表10　父親の親性の形成　（%）

	東京	ソウル	天津	台北
妊娠	18.6	24.7	32.3	39.5
胎動	22.7	21.9	40.6	34.4
産声	39.1	46.6	68.8	69.9
授乳	32.1	51.6	67.9	67.0

「父親になると、とても感じた」割合

母親と同じように、どの都市の父親も「妊娠―胎動―産声―授乳」と経過するにつれて、親としての意識が高まっていく。そうした中で、東京の父親の親性の形成は、他の都市の父親より低い。

その他のデータは省略するが、4都市の中で、東京の父親の育児関与がもっとも少ない。「オムツの取替え」を例に取ると、「いつもする」割合は、東京10.9%、ソウル13.5%、天津31.8%、台北38.9%である。

⑤　全体として

今回の調査を通して、「熱心に子育てをする母親」と「子育てへの関心の薄い父親」の組み合わせのように思われる。日本の母親は真摯に子育てに取り組んでいる。それだけに、熱意が余って、不適応状態に陥ることがある。それが育児不安だと思われる。

⑥　今後の課題

すでにふれたようにサンフランシスコとマルモでの調査が難航した。特にサンフランシスコでは、何校かの小学校を訪ねたが、調査の実施に至らなかった。日本と家族の形態が異なっているので、調査票を含めて、受け入れやすい項目を作り、欧米での調査を実施したいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①「育児不安と母親の育児不適応をめぐる一考察」
東京成徳大学子ども学部研究年報、vol.9、2008.3、130 ページ（レフリーなし）
研究年報全体が本研究の報告書で、執筆者は深谷昌志の他、開原久代、深谷和子（研究分担者）、研究協力者 2 名に協力を求めた。

②「育児不安に関する国際比較研究」
東京成徳大学子ども学部研究年報、vol.6、2007.3、85 ページ（レフリーなし）
研究年報全体が本研究の中間報告書で、執筆者は深谷昌志の他、研究協力者 4 名に協力を求めた。

③「育児不安の構造に関する考察」
東京成徳大学子ども学部研究年報、vol.3、2006.3、83 ページ（レフリーなし）
研究年報全体が本研究の第一次報告書で、執筆者は深谷昌志の他、研究協力者 5 名に協力を求めた。

〔学会発表〕（計２件）

① 深谷昌志他、研究協力者 4 名、
「育児不安と父親の育児関与」
日本子ども社会学会 16 回大会、2009.7.5、中国学園大学（レジュメ提出済み）

② 深谷昌志他、研究協力者 4 名
「三都市（東京、ソウル、天津）の母親の育児意識の考察」
日本子ども社会学会 15 回大会、2008.6.29、松山大学

〔図書〕（計２件）

① 深谷昌志編、学文社、
「育児不安の国際比較」2008 年 8 月、201 ページ
同書の中の一部を紹介すると以下の通りとなる。
「母と子、そして育児不安」1 章 4 節、p58～76、深谷和子
「虐待のハイリスク要因をさぐる」2 章 3 節、p115～126、開原久代
「一人っ子政策下の育児」3 章 2 節、p143～158、周建中
「母親の育児意識の比較研究」2 章 1 節、p77～97、深谷昌志

② 深谷昌志、有斐閣「育児関与する父親」柏木恵子・高橋恵子「日本の男性の心理学」所収、2008.6、p170～185

６．研究組織

(1)研究代表者
深谷　昌志（FUKAYA　MASASHI）
東京成徳大学・子ども学部・教授
研究者番号：00031542

(2)研究分担者
開原　久代（KAIHARA　HISAYO）
東京成徳大学・子ども学部・教授
研究者番号：50369427
周　建中（ZHOU　JIANZHONG）
東京成徳大学・人文学部・教授
研究者番号：80300383
深谷　和子（FUKAYA　KAZUKO）
前東京成徳大学・人文学部・教授、
東京学芸大学・名誉教授
研究者番号：00015447
今井　和子（IMAI　KAZUKO）
前東京成徳大学・子ども学部・教授、
立教女学院短期大学・幼児教育科・教授
研究者番号：40279708

(3)連携研究者
萩原　元昭（HAGIWARA　MOTOAKI）
埼玉学園大学・幼児発達学科・教授
研究者番号：20008171
（保育関係）
富山　尚子（TOMIYAMA　NAOKO）
東京成徳大学・子ども学部・准教授
研究者番号：80345412
（サンフランシスコ調査）
馬場　康宏（BABA　YASUHIRO）
東京成徳短期大学・幼児教育科・准教授
研究者番号：80341907
（幼稚園関係）

研究協力者
李　珠絹　空中大学教授（台北調査）
李　光衡　韓国文部省顧問（ソウル調査）